

「ほんのまくら 2017」解答リスト ～わかたけ図書館～

No	本のまくら	本のタイトル	著者	出版社	分類
1	ゼロから何かを生み出す。	考え方のコツ	松浦弥太郎	朝日新聞出版	159.4
2	私は八六歳です。元気で人生を楽しんでいます。	125歳まで、私は生きる！	渡辺弥栄司	ソニー・マガジズ	159.79
3	私は十八になる女で、昨年 <small>の</small> 春 <small>立</small> の高等女学校を卒業した者です。	きょうも誰かが悩んでる「人生案内」100年分	読売新聞生活部	中央公論新社	159
4	かつての私はどこに行くときにも釣り竿をもっていた。	日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか	内山節	講談社	201.1
5	私が社会部の宮内庁担当を命じられたのは、昭和六一年（一九八六）二月、三八歳の時でした。	天皇家の宿題	岩井克己	朝日新聞社	288.4
6	警察組織のなかで、どこの部署に所属する警察官を「刑事」と呼ぶか。	刑事（デカ）魂	萩生田勝	筑摩書房	317.75
7	わが子を〝もっと幸せにする〟には、どうしたらよいのでしょうか？	校長という仕事	代田昭久	講談社	374.3
8	睡眠にまつわるさまざまな悩みが、現代社会を蝕んでいます。	眠る秘訣	井上昌次郎	朝日新聞出版	491.371
9	もともと医者になったのは、成り行きだった。	ブラック・ジャックになりたくて形成外科医26の物語	岩平佳子	日本放送出版協会	494.288
10	この本はとりあえずいまの生活をもうすこしましな方に変えたいと考えているひとの役に立つことを願ってつくられました。	自然のレッスン	北山耕平	筑摩書房	498.3
11	「ときどきは、強いけど、つまらない」	東大卒プログラマー 論理は結局、情熱にかなわない	ときど	PHP研究所	798.5
12	インタビューを始めるにあたって、島田吉彦（仮名・当時五十二歳）は言った。	ドキュメント道迷い遭難	羽根田治	山と溪谷社	786.18
13	東日本大震災は日本のスポーツシーンを大きく変えた。	箱根駅伝	生島淳	幻冬舎	782.3
14	言葉というものは、それを使ってきた人の歴史を背負っているものです。	さりげなく思いやりが伝わる大和言葉 常識として知っておきたい美しい日本語	上野誠	幻冬舎	814
15	世界が大きく変わるとき、そこには歴史に残る名スピーチがあります。	スピーチライター 言葉で世界を変える仕事	藤山洋介	KADOKAWA	809.4
16	彼女は窓の方を向いていた。	少年検閲官	北山猛邦	東京創元社	913.6
17	先ほどまで首筋にまとわりついていた湿気は、いつの間にか霧雨に変わったようだ。	螢坂	北森鴻	講談社	913.6
18	その岬は、爪先を伸ばした足を横から見た形に似ていた。	黄金旅風	飯嶋和一	小学館	913.6
19	今年の黒豆は、すこぶる出来がよかった。	こんな夜は	小川糸	幻冬舎	914.6
20	もう時効だろうと思うので書くが、十年近く前、「超」の付く遠距離恋愛をしていたことがある。	君へ。 つたえたい気持ち三十七話	ダ・ヴィンチ編集部	メディアファクトリー	914.68
21	ある朝、カワバタ丸がこう言った。	うなぎ丸の航海	阿井渉介	講談社	915.6
22	好きと言ったのだから	やがて今も忘れ去られる	銀色夏生	角川書店	911.56
23	一九九二年の五月、シー・クリフというニューヨーク郊外の静かな町に住む従弟 <small>の</small> 家に招かれて、幾日かをのんびりと過ごした。	ひとたばの手紙から 戦火を見つめた俳人たち	宇多喜代子	角川学芸出版 角川書店	911.36

24	僕がはじめて、フォーという言葉を聞いたのは、いつだったか。	フラグラーの海上鉄道	野中ともそ	集英社	913.6
25	いってきます、という声とともに廊下を横切った幸臣が全身紺色に見え、おや、と首を傾げてすぐに、あ、そうか、と気づく。	時の罫	辻村深月 ほか	文藝春秋	913.68
26	『オフィスの方で、お話を伺いましょうか』	ドアの向こう側	二階堂黎人	講談社	913.6
27	あやとり。修学旅行のジェットコースター。体育のストレッチ。	この部屋で君と	朝井リョウ ほか	新潮社	913.68
28	下駄履きのくるぶしに風がひやりとした。	かなりや	穂高明	ポプラ社	913.6
29	「だめよ、そんな服じゃ」	ショートソング	栢野浩一	集英社	913.6
30	十七歳というのは、人生のなかでも最も輝かしく、若さがみなぎり、歩いているだけで金色の粉がきらきらと舞うような、希望にみちあふれた年齢ではないのだろうか。	どんまいっ！	椰月美智子	幻冬舎	913.6
31	「マディソン、この履歴書はすばらしいわ」	書店猫ハムレットの跳躍	ブランドン／著 越智睦／訳	東京創元社	933.7
32	イスタンブール発パリ行きエアバス五四〇三便は失速した。	彼女のいない飛行機	ミシェル・ビュッシ／著 平岡敦／訳	集英社	953.7
33	朝は普通の曇りの日で、白い日ではあったけれど、黄色の日になるとは誰も知らなかった。	ビリジアン	柴崎友香	河出書房新社	913.6
34	郊外のかかなり大きな家の食堂、ある成功した工場主の持ち家である。	夜の来訪者	プリーストリー／作 安藤貞雄／訳	岩波書店	932.7
35	朝一番にすることは、体重を測ることである。	ヨモギ・アイス	野中柊	集英社	913.6
36	私の書齋のいろいろながらくたものなどいれた本箱の引き出しに昔からひとつの小箱がしまっている。	銀の匙	中勘助	KADOKAWA	913.6
37	七月七日にわたしたちは出会った。	左京区七夕通東入ル	瀧羽麻子	小学館	913.6
38	小野寺朋子は、腕時計の秒針を見つめた。	始動 監視庁東京五輪対策室	末浦広海	KADOKAWA	913.6
39	私はその頃、アルバイトの帰りなど、よく古本屋に寄った。	されどわれらが日々	柴田翔	文藝春秋	913.6
40	朝、つとめに出るドアをあけると、ちょうどむかひのドアもあいた。	一生に一度の月	小松左京	集英社	913.6
41	廊下には高窓から光が降りそそいでいた。	美しい人 9 lives	古閑万希子	講談社	913.6
42	話題もつきたようだし、そろそろ電話を切ろうと思っているところに諏訪が新たな話題を提供した。	ピアノ・サンド	平田俊子	講談社	913.6
43	一九九九年九月九日。	地球を走る アメリカ横断オートバイ旅行記	鈴木光司	集英社	915.6
44	ラザフォード家の娘の行方がわからなくなってから八日が過ぎて、ラリー・オートが家に帰ると、モンスターがなかで待ち構えていた。	ねじれた文字、ねじれた路	トム・フランクリン／著 伏見威蕃／訳	早川書房	933.7
45	僕の手許には今、『お伽草紙』と表紙に銘打たれた一冊の文庫本がある。	王様は裸だと言った子供はその後どうなったか	森達也	KADOKAWA	914.6
46	川藻の茂みを掻き分けるようにして姿を現したアロワナは、水槽を覗き込んだ瞳子の前にひらりと泳ぎ出て、青みがかった銀色の体をくねらせる。	アクエリアム	森深紅	講談社	913.6
47	人は年齢をとれば誰でも老人になることができるのか……これが、この作品をつらぬく巨大な謎かけである。	老人の極意	村松友視	河出書房新社	914.6

48	チェアウォーク、と聞いてもピンとこない人のほうが多いかも知れない。	チェアウォーカーという生き方 私は車椅子で歩く。昨日も、今日も、明日も	松上京子	小学館	916
49	小説の愛読者には、世間では「傑作」とか「名作」とか言われている小説なのに自分にはサッパリそのよさがわからないという経験をしたことが、一度ならずあるものだ。	あの作家の隠れた名作	石原千秋	PHP研究所	910.26
50	太宰治の小説『人間失格』を読み返すたびに、思うことがあります。	モデル失格	押切もえ	小学館	589.2